海音寺潮五郎・人と文学

尾崎秀樹

音寺潮五郎・人と文学

崎秀樹

朝日新聞社

海音寺潮五郎・人と文学

定　価　九八〇円

昭和五十三年十二月十五日第一刷発行

著　者　尾崎秀樹

発行者　朝日新聞社　藤田雄三

印刷所　凸版印刷株式会社

発行所　朝日新聞社　東京・大阪・名古屋・北九州

©尾崎秀樹　一九七八年

0095—254618—0042

目次

第Ⅰ部　文学的特質　5
第Ⅱ部　軌跡を追う　21
第Ⅲ部　史伝の系譜　103
1　史伝の系譜　105
2　「赤穂義士」の位置　110
3　幕末の群像　116
4　権力への抵抗感　122
5　将門と純友　127
6　人物月旦の醍醐味　132
7　お家騒動の実相　140

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

8　天地悠久の間に　148
9　歴史意識の内在化　157
10　維新史を解く存在　169
奄美に西郷の遺跡を訪ねる　180
あとがき　205
海音寺潮五郎年譜　209

装幀　多田進

第Ⅰ部　文学的特質

足軽精神

海音寺潮五郎の初期の文章に、「足軽精神」と題したエッセイがある。これは「文学建設」の昭和十四年十二月号に掲載された。短い文章なのでそのまま引用させてもらおう。

「文学精神は足軽精神である。

大家的意識を持った時——城砦をかまえて腰をすえた時、その人の作家としての生長はとまったのである。

絶対に自分の仕事のあとに満足してはならぬ。腰をすえてはならぬ。

三間柄の槍をひっさげて、敵陣に馳突して死んでももとだ。よき敵を討取ったらそれだけ儲けものだという意気込をもって、あくまでも勇敢に、あくまでも貪婪に不断に新しき境地、新しき境地へと進撃して行くべきである。

作家として生きて行くかぎりそれは死に至るまでつづく血みどろな戦いだ。不断に自己を否定し、不断に自己を創造して行く苦行道だ。この覚悟なき者は作家たるの資格なし」

私はこの言葉をひとつの自戒としている。〝足軽精神〟とは大衆のこころだ。つねに大衆のなかに生きる気持がなくしては、言葉の真の意味における文学の大衆的な創造は望めない。

歴史は英雄の天才的な力によって推進される。しかしそれだけでは歴史は築かれてゆかないのだ。一個の英雄のはなばなしい栄光の影に、無数の無名の人々のしかばねが横たわる。〝足軽精神〟は

歴史における名もなき民の存在をいうだけでなく、その名もない民が時には時代変革の推進力にもなることを一面でものがたっている。三間柄の槍をひっさげて敵陣へとびこんでゆく足軽たちの夢と現実は、そのまま歴史文学にたいする作家の目をしめすようだ。海音寺潮五郎はみずからこの足軽精神を文学認識の基礎にすえ、「不断に自己を否定し、不断に自己を創造してゆく苦行道」だと説く。これは作者の心構えであるだけでなく、文学一般に通じる問題であろう。

普通には海音寺潮五郎は歴史のなかの英雄像を好んで書いてきた作家のように受けとられている。たしかに「平将門」や「天と地と」「西郷隆盛」、あるいは「武将列伝」などを見ると、そういった考えを抱く人もいるにちがいない。しかし海音寺潮五郎はけっして英雄礼賛の小説を書いているのではなく、むしろ一個の人間が歴史のなかではたす役割を客観的にとらえ、英雄としての条件を大衆の側からの仰角の姿勢でとらえているところに特色をもつ作家だ。そのことを忘れてしまうと、海音寺文学の歴史的ひろがりを見あやまることになりかねない。〝足軽精神〟はその歴史をローアングルでとらえることの意義を強調するだけでなく、英雄はもともと大衆のなかからおこり、大衆とともにいる間は栄え、それを裏切った時、歴史をも裏切ってしまうということをものがたるようにさえ思われる。

海音寺潮五郎は現在の世相を直言して、おおやけのために憤るこころを失ったこと、および英雄の存在しないことを嘆いたことがあったが、この気持の底には時世にたいする怒りがあり、さらにそれは一種の抵抗感につらなるものであることを教えられるのだ。英雄待望がいわれる時ほど英雄のとぼしい時代はない。海音寺潮五郎が英雄の出現をのぞみ、その衰亡した末世の状態に憤りを感

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

じるのも、国民的英雄にたいする期待がなせるものであって、けっして戦時中にみられたような排外的な意味での偶像をもとめているのでないことはいうまでもない。〝足軽精神〟はその意味でも重要な作家の創造の大前提をなすものであろう。

史記と海音寺文学

海音寺潮五郎が「史記」を読んだのは、中学四年のおりに神経衰弱で一年間休学した時だという。列伝の抄本を読んだのが最初だそうだが、いらい海音寺潮五郎の心のなかには、「史記」にたいする強い牽引がはたらき、彼の歴史文学の基本的方向となる。その意味では「史記」は重要な歴史開眼、いや文学開眼の書ということになろう。

司馬遷の「史記」の「斉太公世家」につぎのような話がでてくる。斉の国に崔杼という権力者がいたが、その崔杼の夫人はすぐれた美貌の持主だったため、主君にあたる荘公に目をつけられ、家庭の破局にまで発展する。こうして荘公は崔杼にはかられて殺されてしまう。そのことを斉の国の史家は事実に即して「崔杼荘公を弑す」と書いた。権力者の崔杼は腹をたてこの史官を処刑した。処刑された史官の弟がそのあとをつぎ、同様な記録を残した。崔杼はふたたび憤って弟の史官も殺した。するとさらにその弟が史官に就任し、これまた「崔杼荘公を弑す」と書いた。そのため崔杼は折れて、史官の弟の弟を処刑することをやめた。

歴史とはこのようなものである。権力者が歴史記述をゆがめようとしても、史実をまげることは

許されない。斉の国の史官は、歴史の記録に忠実なあまり、権力者の要求にしたがわず客観的な事実を記載した。権力者である崔杼は歴史家の生命を奪うことはできた。しかし歴史そのものを歪曲することはついに不可能だったのだ。権力者は権力の権化となるとき、人間を裏切り、歴史を裏切る。歴史家は客観的な史実という動かしがたいものをもって、権力者に無言の抗議をすることができるし、そうすることによって正しく歴史のありかたを次の世代へ語りつたえることができるのだ。

歴史作家はこの斉の国の史官の意識を心の裏側に秘めることによって、はじめて言葉の真の意味での歴史文学者となり得る。おそらく「史記」の作者である司馬遷は、「斉太公世家」のこのくだりを叙したとき、言外に歴史記述者としての決意のほどを塗りこんだにちがいない。

この意識は、司馬遷が「史記」の巻末に書いた「太史公自序」のなかで孔子の「春秋」をひき、孔子のごとく「我れ之を空言に載せんと欲するは、之を行事に見わすことの深切著明なるに如かざる也」と述べた姿勢ともかさなるものだ。〝空言〟のかたちで語ったのでは切実でないために、事実に托してそれを語る筆法は、司馬遷の場合宮刑にあった彼自身が現実の状況をその小宇宙に再構成してゆく基本的な構えだということがいえよう。

海音寺潮五郎の歴史ものには、この司馬遷いらいの文脈が伝えられており、それが独特な現代における史伝文学を花開かせることになるのだが、その底にもうひとつ〝足軽精神〟が介在していることもふくめて特色をみなければなるまい。

ただしことわっておくが、歴史文学はいわゆる客観的な歴史記述とはことなる。そこには詩情がくわわるからだ。ハイネのいう歴史文学の定義がここでよびおこされる必要があるだろう。

大衆文学の流れ

海音寺潮五郎は「サンデー毎日」に時代ものを投稿し、その創刊十周年記念の長編小説の懸賞に応募して文壇に登場した。また「天正女合戦」や「武道伝来記」によって直木賞をうけている。それらの履歴から考えると、いかにも大衆文学のオーソドックスな道をあゆんだ人のように思われがちだが、かならずしもそうとはいえない。大衆文学のもつ可能性をひろげてきた作家の一人ではあっても、いわゆる大衆文学の中心にあった伝奇的ロマンの方向とは根本的に違う作家だ。

海音寺潮五郎が週刊誌やクラブ雑誌等を発表舞台にしたのは、ひとつには史伝ものだからといって特別な媒体が与えられなかったこととも関連している。史伝ものにとって発表舞台の制限はあきらかな障害であった。史伝家たちの多くは、むしろ大衆的な発表舞台をえらぶことによって、その遺産をまもり抜いたといえる。

日本の大衆文学は関東大震災の一、二年後に成立した。その土台にはマス・メディアの成熟ということがある。週刊誌や国民的娯楽誌のあいつぐ創刊、日刊紙の百万部突破などによって、新しい読者層が獲得され、その読者層の要求にもとづいて、新興文学としての大衆文学が生れた。けっして通俗的なものをはじめからもとめたわけではない。発生期の大衆文学は既成の文学を打破し、新しく新興文学としてまとまろうとする熱気のようなものをはらんでいた。それは純文学の身辺雑事小説的なものにもあきたらず、かといってそれまでどおりな講談や人情噺にも満足できない読者の

要求にもとづくものだった。

しかし時代小説として出発したために、大衆文学はいろいろな面で誤解をまねいている。外国の場合なら、大衆文学といえば大量消費のための商品文学と規定されるのが一般的だが、日本ではかならずしもそうではなかった。商品文学の枠からはみ出したところに、日本の大衆文学の特質があったからだ。

日本の大衆文学が時代小説として定着したことには、それなりの意味があった。もともと大衆文学の正常な発展は、市民社会の成熟を土台に、文学の市民的展開がなされ、国民文学としての大衆文学へ発展することが理想とされた。しかし日本では近世にいたる文芸の庶民的伝統は、文学の近代化にあたってネグレクトされ、ヨーロッパ近代文学に範をもとめて、それに追いつき追い越そうとする努力をみせたため、近世から近代へ架橋される際に重要な庶民的文芸の伝統が継承されないままで残されるといったかたよりがあった。大衆文学はそのかたよりを克服し、本気になってその文化遺産の継承につとめた文学だったともいえる。

そのため一部の論者たちから封建的ロマンへの傾斜を批判されることにもなった。たしかに日本の大衆文学には、封建的なものへつよく傾斜したものが少なくなかった。長谷川如是閑はとくにその点においてきびしく警告し、批判した評論家のひとりだが、大衆文学がもつ内容批判とはなり得ても、どうして大衆文学が時代小説（伝奇的ロマン）として定着したかのナゾをとくことにはならない。

その第一は明治以来の近代文学の歩みにたいする、庶民的なかたちでのアンチ・テーゼという意

味あいがふくまれている。二葉亭いらいの文学の近代化が見落してきた、大きな近世いらいの文芸の庶民的伝統を回復し、継承発展させようとするこころみが、新興文学としての大衆文学の土台にはうずいていた。その意味の重要さにくらべると、日本人大衆が〝殺し〟に深い関心をもっていたとか、歌舞伎いらいの伝統だとかいう理由は第一義的なものではなくなってくる。

海音寺文学の出現

今でこそ大衆文学は、ミステリーやユーモア小説、それに家庭恋愛小説までふくむようになったが、時代小説が基本型であった当時の性格は、依然として基底にひそむように思われる。文芸の大衆的伝統は、三遊亭円朝の人情噺とか村上浪六の撥鬢小説をへて中里介山の「大菩薩峠」にいたったが、これは一種の庶民的文芸伝統への強力な回帰を請求するものだった。

伝奇小説とは吉川英治の「鳴門秘帖」や白井喬二の「富士に立つ影」、国枝史郎の「神州纐纈(こうけつ)城」などに象徴的にしめされたロマン・ピカレスクなもので、大衆の奔放な空想力を刺戟し、ロマンへの展開をたっぷりとはらんでいた。たしかに人物は類型的で、ストーリイは月なみなものが少なくなかったが、大衆読者は身辺雑事的な私小説にはない夢をその大衆文学に托したものだ。しかし大衆文学はマス・メディアを舞台に発表されたマスコミ文学としての規制をつよくうけ、まもなくマスコミそのものの法則にしたがい、自縄自縛の運命をたどることになる。

その傾向がつよまるのは、いわゆる満州事変以後のことだが、たとえば大衆作家が時代ものと一

緒に通俗小説をも執筆し、家庭恋愛小説を書いた通俗作家が逆に大衆時代ものを発表するといったことにより、伝奇的ロマンの骨格はあいまいなものになってしまう。そこへもうひとつ、国家権力による言論統制のプレッシャーがかかり、大衆文学をひとしなみに同じ枠組のなかでとらえようとする、きわめて大まかな認識が大手をふって通るようになった。新興文学としての大衆文学の骨組みは、すっかり弱められてしまったのだ。

海音寺潮五郎の文学の出現は、まさにそのような時にあたっている。史伝的なものをつよく志向する彼が、大衆文学のこのような歴史のなかにどう位置づけられるものか、その問題はきわめて難しい。大衆文学の通俗化がマスコミによって、さらには国家権力によっておしすすめられようとしていた時、海音寺潮五郎は時代もの作家として作家生活をはじめた。この両者の間にみられる落差、あるいは距離を正しくみきわめることによって、海音寺文学の位置づけが可能になってくるかもしれない。

純文学の世界では、史伝ものを発表する場がなかった。海音寺潮五郎はそういったメディアがありさえすれば、そこに書いたかもしれない。いわゆる文壇を意識しての文学青年ではなかった彼にとって、「サンデー毎日」の新人賞や千葉亀雄賞の懸賞に応じることはあきらかにひとつの登竜門だった。彼はやむを得ずそうしただけでなく、発表の場を大衆的なメディアにとることによって、むしろ積極的に文学の大衆的なひろがりを学ぶことになった。このことは彼の文学が史伝的な系譜をひくだけでなく、つねに大衆とともにあったことを考える時、思いあたることなのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com